

深い学びの実現に向けた学習過程の工夫

～数学科を軸とした各教科における見方・考え方を働かせた授業づくりを通して～

四万十市立中村中学校
校内研修だより
NO. 1
2021.6.18

今年度は、「高知の授業の未来を創る」推進プロジェクト『実践研究協働校事業』の指定を受けています。

本指定事業では、これからの時代に求められる資質・能力を育成するため、主体的・対話的で深い学びの視点からの学習指導の改善・充実やカリキュラム・マネジメントの推進を図ることが求められています。

特に小中学校が協働して9年間の学びの系統性を見通した計画的かつ継続的な教育課程を編成していくことが大きなねらいとして挙げられています。

齊藤一弥 島根県立大学教授 来校

午後の協働校事業に先立ち、齊藤先生に午前中に国語、社会、数学、英語の各授業を参観していただき、その後様々なご指導・ご助言をいただきました。ポイントは以下の通りです。

Point I 「脳に汗をかく授業になっていたか」

- ・生徒にとって必然性のある（言語）活動を描くこと
- ・生徒の有能さを引き出すための問いを設定すること
- ・内容・方法の再検討（状況を上手く変化させる）が必要

Point II 「正解のない学びをいかに描くか」

- ・思い付きの発言をいくら重ねても生徒に力はつかない
- ・様々な側面の根拠（調べさせる）から多面的・多角的に分析させる

教科の本質をいかに生徒に学ばせるか！

「実践研究協働校事業『教材研究会I』」

◇12年間の系統に関心を持つ！◇



中3国語「書く」

(1)中3のその先を見通す

- ・学習過程を通して、主観から独立して客観性・信頼性が判断できる生徒を育成する。

(2)客観性・信頼性をいかに担保するか

- ・情報を吟味して取捨選択し整理できるようにする。
- ・批判的思考で情報の正しさ、根拠の適切さ、情報の入手先を検討することができるようにする。

(3)言語活動を生徒が切り拓くために

- ・教師が活動のバリエーションをより多く持つこと大事である。

全教科に向けて

- ・教科のプロとしての自覚を持つ。
- ・教科の本質、新しい「能力ベース」とは何かを考える。
- ・12年間の系統に関心を持つことが大切。
- ・全ての教科において学び進んでいくその先を見据えること。